

歴史を見つめなおす

この数年、石見銀山の現地に足しげく通えません。臨場感や時事性のある情報がお伝えできなく心苦しく思っています。しかし、このことを補うに余りある情報の提供や見聞もあります。

井戸さんの頌徳碑が身近にあったこと、遠足でゆかりの山城や海辺にいったこと、瀬戸内海の港へ続く銀山街道を歩いていること、ふるさとの味を思い出してみること・・・今回はそのひとつをご紹介します。

「愚妻安産いたし候所 母子とも堅固大慶至極仕候 女子につきお千代と名を付け申し候」、「おみつ儀 疱瘡本うみになり・・・」。

これは銀山に関わり深い旧家の江戸時代文書に記されたもので、末えいの方が開設されたホームページで知りました。

「子供の出産は今も昔もうれしい」、「江戸時代、子供の病気で恐ろしいものは疱瘡(ほうそう)。幼子が奇跡的に快復した場合、その体を酒湯(ささゆ・お酒をいれた

お湯)で浸した手拭いで拭いてやったようだ」。

これは、そこに書かれているコメントで胸を打ちます。まず最小単位の家族があり、喜怒哀楽の日常があったこと。たとえば、男女の別は問わず子供の出産はうれしい。疱瘡病いにかかった(今では絶滅宣言された天然痘。江戸時代は死に病であった)幼子が奇跡的に快復したときは心底喜んだ親の姿に思いをよせられたのでしょうか。歴史は、そういった日々の姿の延長線上にあるのだと、改めて気づかせてくれます。

石見銀山の場合、ともすれば鉱山であるので、男社会や技術、経営などに目を奪われがちで、わたしもそのひとりとして自戒しています。最近、「ユビキタスーいたるところに存在するという意味のラテン語が語源」、「神は細部に宿る」という言葉によく触れます。いたるところの細かいことに触れる機会はきっと身近にあるはずです。そして現在を見つめなおすことにもつながると思います。



清水の金柄杓 (今年2月撮影)
温泉津街道清水地区にある道床山の伏流水を水源とした古くからの水飲み場。近所の方がロウソクに明りを灯し水神さんのお祭りをかかさない。

8月の水神さんのお祭りは、地元の人々により今もなお続いている。

問い合わせ：教育委員会生涯学習課 TEL0854-82-1600(代) / 大田市ホームページ <http://iwamigin.jp/ohda/>

ふるさと文芸賞作品募集!

大田市では、温泉津町出身で、山陰唯一の直木賞作家であり名誉市民でもある難波利三さんが審査員長を務める「ふるさと文芸賞」の作品を募集しています。

難波利三さんは、温泉津町湯里の生まれで、現在は、大阪府堺市に在住。昭和59年に「てんのじ村」で第91回直木賞を受賞し、そのほかにも「地虫(おむし)」「イルティッシュ号の来た日」「大阪笑人物語」など多くの作品を執筆されています。

難波さんは、著書や講演活動の中で、ふるさと大田市を全国に情報発信するとともに、まちづくりについて様々な提言を行うなど、ふるさとの発展に多大な貢献をされました。旧温泉津町では、難波さんのこれらの功績に対し、平成12年度に町で初めてとなる名誉町民(現在は名誉市民)の称号を贈るとともに、新しい文化の創造と交流の拡大などを目的に本文芸賞を創設。市町合併をはさみ、今回で8回目の開催となりました。



第7回ふるさと文芸賞授賞式の様子

本文芸賞は、第1回から「ふるさと」をテーマにしたエッセイ(随筆)を募集し、毎回全国からたくさんのお応募をいただいています。皆さんもこの機会に是非ふるさとへの思いを書き綴り、本文芸賞に応募されてみてはいかがでしょうか。字数は1200字以内で、高校生以上の部と小中学生の部があります。応募締め切りは8月末。詳しい募集内容などは、チラシまたは市のホームページをご覧ください。たくさんのお応募お待ちしております。